［講演とワークショップ　生誕110年・没後80年／小林多喜二の国際性］

司会・コーディネーター　高橋秀晴

発表要旨

荻野富士夫:『蟹工船』への新視点「帝国軍隊―財閥―国際関係―労働者」の全体的考察

数年前の小林多喜二『蟹工船』への再注目は、現代の過酷な労働状況との類似性から導かれたわけだが、多喜二は執筆直後の蔵原惟人宛の書簡にあるように、「軍隊自身を動かす、帝国主義の機構、帝国主義戦争の経済的な根拠」に注目し、「帝国軍隊――財閥――国際関係――労働者」という「一本の糸」を「蟹工船」を舞台に描くという、もう一つの意図をもっていた。

当時、工船蟹漁業は急速に発展し、新聞などの現地取材にもとづく特集報道がなされ、社会的な関心を集めていた。多喜二の母校小樽高商でも学生の「産業調査論文」でとりあげられていた。多喜二の関心もそうした状況のなかにあり、『蟹工船』が多くの読者を獲得する背景となった。

しかし、多喜二の卓越性は、「一本の糸」のつながりを暗示したことにある。たとえば、 出航前の博愛丸サロンでの接待・饗応の場面を設定するほか、監督浅川に出航直前に「国際漁業戦」論・国家的事業論を語らせる。そのからくりは漂着した川崎船船員に対する「赤化」のオルグ、ストライキに対する帝国軍艦による鎮圧劇などをとおして暴露されていくが、まだ「帝国軍隊―財閥―国際関係―労働者」の全体的把握には到達していない。その残された課題は、とくに「満洲事変」後の反戦小説において克服がめざされていく。

古河美喜子:ロバート・ヘリックにおける詩と社会問題

小林多喜二(1903-1933)は秋田生れの偉大なプロレタリア文学作家である。前回2008年度秋田開催の東北大会では、同じく秋田県土崎町出身の小牧近江に関する鼎談(ていだん)が行われたが、秋田はプロレタリア文芸運動『種蒔く人』の発祥の地でもある。多喜二はこの小牧らのクラルテ運動の影響を受け、社会主義ひいては植民地問題に関心を持つようになる。『蟹工船』(1929)は「おい地獄さ行(え)ぐんだで！」という衝撃的な書出しと共に注目を集めプロレタリア作家としての地位をも確立するが、その四年後に政府の弾圧を受け拷問死するという壮絶な最期を遂げる。ワークショップに先立ち荻野富士夫氏の招聘講演中でも触れられた多喜二の「書かなければならない」という決意はプロレタリア作家としての使命に満ちており、このような意識は時空を超えてイギリス十七世紀の王党派詩人ロバート・ヘリック(1591-1674)が担おうとした詩人として持つべき社会的役割や詩作態度とも結びつくように思われる。本報告では、内乱期のイギリスという時代性との関わりを踏まえ「政治的でありつつ、美学的側面をテクスト中に併存させ文学作品としても成立させようとする」ヘリックと「共産主義者であり、しかし同時に作家であった」多喜二の作家としての姿勢に着目し、浜林正夫氏が『小林多喜二とその時代―極める眼―』中に挙げる「すべての人の生き方にかかわる問題」に向き合う「書く」という行為について比較考察を試みた。

加賀谷真澄:一八九〇年代の貧困表象

明治三一(一八九八)年、労働組合期成会の機関誌『労働世界』に、横山源之助の小説「鉄骨児」が発表された。この作品は、「労働小説」として紹介されたが、明治の文壇において「労働小説」という言葉が登場したのは、この時だけであり、これ以降、使われることはなかった。労働運動の黎明期、貧困や労働問題にかかわっていた知識人・社会主義者たちは、中流以下の層に向けた移民関連の雑誌や『成功雑誌』などの仕事も同時にしており、彼らの交友関係や活動領域は重なり合い、緊密に連携することとなった。やがて海外移民は、貧困や労働問題を解決する手段としてみなされるようになる。貧民街や労働者の貧困状態を新聞紙上で発表していた横山源之助も同様の考えを持っていた。「鉄骨児」に描かれたのは、当時の知識人の一般的な認識―すなわち、貧しい労働者の成功のカギは海外雄飛ある―というものだったのである。「労働小説」は、大正期にプロレタリア文学の先駆として現れた「労働文学」とは異なっている。しかし、明治期すでに、労働者の文学をつくりだそうとする動きがあったことが確認できる。

高橋秀晴:クラルテ運動と「種蒔く人」

小牧近江(秋田市土崎出身、1894～1978)は、パリ在住期の1918年秋、フランスの小説家アンリ・バルビュス(1873～1935)と出会い、国際的反戦平和を目指した「クラルテ運動」(「クラルテ」は「光明」の意)に参加するようになる。1919年に帰国した小牧は、クラルテ運動を広めるべく同志を求め、1921年2月土崎版『種蒔く人』を創刊、新聞紙法に違反したとして3号で廃刊に追い込まれたが、同年10月には東京版として復活させた。その一方、佐々木孝丸とともにバルビュスの小説「クラルテ」を翻訳し、叢文閣から刊行(1923.4.12)する。当時小樽高商に在学していた小林多喜二は、この訳本の最終部分を卒業論文の序文の扉に引用するなど、強い関心を寄せていた。卒業直後の1924年、多喜二は同人誌『クラルテ』を発行、その第1輯の扉にも前述の一節を載せている。さらに、実現はしなかったものの、小牧に寄稿を依頼する葉書を出している。以上、バルビュスが始めたクラルテ運動を小牧が紹介し多喜二に影響を与えていった経緯について報告した。

印象記

このたびの支部大会は、小林多喜二の生誕地秋田で開催された。生誕110年・没後80年を記念し「小林多喜二の国際性」のテーマで、荻野富士男氏の講演と3名の発表者によるワークショップが行われた。私は日本の近代文学を専門としているが、今回はじめて本会に参加した。国際的視野にたって、多様な言語・文化を専門とする参加者が、広い視野から意欲的な問題提起と活発な議論を行ったことに、たいへん刺激を受けた。本会の議論を紹介しながら、私の印象を記したい。

荻野氏は「『蟹工船』への新視点—「帝国軍隊—財閥—国際関係—労働者」の全体的考察」の題で、『蟹工船』が国際経済・政治構造のなかに労働者を位置づけた表象を企図したことを、詳細な資料によって跡付けた。ワークショップでは、古河美喜子氏が「ロバート・ヘリックと小林多喜二—王党派詩人と革命作家の政治性と芸術性」の題で、17世紀イギリスの王党派詩人ヘリックの詩的実践を紹介。加賀谷真澄氏は「一八九〇年代の貧困表象と横山源之助の「労働小説」—プロレタリア文学以前」の題で、日清戦争後の近代化する都市「下層社会」を描いた横山源之助の「労働小説」たる『日本之下層社会』を対象に、これと前後した「移民」ブームと労働者表象に言及した。高橋秀晴氏は「クラルテ運動と「種蒔く人」から小林多喜二へ」の題で、クラルテ運動の国際的連帯を企図した小牧近江が『種蒔く人』を発刊、反戦・共産主義運動による国際的連帯を日本に紹介し、プロレタリア文学運動隆盛のきっかけをつくり、朝鮮の文学者にも影響を与えたと論じた。

扱われた対象の順に並べ替えると、『日本之下層社会』(1895-99)、「種蒔く人」(1921創刊)、『蟹工船』(1929)の順で、明治から大正、昭和への推移のなかに位置づけられる。こうして並べると、地球＝世界規模の(グローバルな)資本主義的帝国主義の時代における労働者表象の系譜というハッキリとしたテーマがみえる。

金融資本・産業資本により地球規模で「世界」が結びつけられ、それと連動した列強国家間の植民地再分割競合、それに起因した「世界」戦争の時代が、「資本主義の最高の段階としての帝国主義」(レーニン)の時代である。国際的産業都市ネットワークが形成され、金融経済が世界規模化する一方で、巨大都市には無産者の「下層社会」が生じる。ヨーロッパを戦場としながら、産業・資本ネットワークが「世界」規模に影響を与えた第一次世界大戦。それに対する反戦運動、社会主義、共産主義運動の機運が生じるなかでおこったクラルテ運動に刺激され、日本での展開として創刊された「種蒔く人」。そして、共産主義インターナショナルの支部として位置づけられた日本共産党の党員活動とともに文学活動をおこなった多喜二。金融・産業資本としての「財閥」による経済活動。それと連動し、戦争を賭け金とした「国際関係」の潮流。それに巻き込まれた、無力で無産な「労働者」。そうしたマクロな社会とミクロな身体とが連関する「世界」像を『蟹工船』が描き出そうと企図し(ながら、成功はしなかっ)たと荻野氏は論じた。

古河氏は、ヘリックが政治・権力と庶民の間で、婉曲的でレトリカルな言語表象を駆使したと指摘した。19～20世紀の日本における政治・経済的な権力の下にある労働者表象の問題に、政治と美学という観点から示唆を与える提起だった。この提起は、多喜二の死以後、プロレタリア文学運動が解体され、戦時体制化する国策の下で表現の自由が奪われていった1930～40年代の表象を考えるときにこそより示唆的だったように思った。

(山崎義光)